

6

# イセリア 英雄戦記

the legend of the Acheru war

立ち読み版

編集 二次元ドリームマガジン編集部

挿絵 牡丹



「セリーヌ、私の声が聞こえにやいかあつ！」

叫んだミーシャの小柄な身体が空高く跳躍し、握った巨大な出刃包丁を、漆黒の刃を持つ剣——クラウソラスに向けて鋭く振り下ろす。

二振りの剣が、ギンッ！ と甲高い金属音をかき鳴らし、散り飛ぶ眩い火花を挟んで、猫耳を生やしたイセリア大騎士団の長ミーシャと、凜とした蒼眼を、無機質な緋色に染め上げているイセリア第一騎士団団長、セリーヌⅡアヴァリアレスが対峙する。

ギユスターヴを退けてから、まだほんの僅かな時間しか経っていない。しかしそのたった数十分の間でオーダイの街は変わり果ててしまっていた。

貿易地として栄えていた美しい街並みは、そのほとんどが無残な瓦礫の山へと変わっている。フィオナたちが泊まっていた宿屋も半壊し、街の至るところに火の手が上がる。焼け出された人々も、何者かが街に振りまいた致死性の毒霧に巻かれ、次々と地面に倒れ、絶命していった。

そんな地獄のような光景でフィオナたちが目にしたのは、美しいロイヤルブルーの髪の毛を、彼女が握った剣と同じ闇色へと変え、無慈悲に街を破壊し続けるセリーヌの姿だった。

「セリーヌ……!! ミーシャ様っ！」

「わかつてるにヤチビオナっ！ この大騎士団長様に任せるにやつっ！」

フィオナの悲痛な声に、セリーヌと剣を交えたままミーシャが頷く。

(この目、髪の色……っ。セリーヌ!!)

ミーシャは自分の身長を遥かに超える巨大出刃包丁に力を込めた。その瞬間――。  
無表情だったセリーヌの口元が妖しく微笑んだ。

「クラウソラス！ そんなにやっ！」

眩い閃光に包まれたクラウソラスの刀身が三叉に分かれ、鏢の形も翼を模したものに變化する。そしてミーシャの出刃包丁にも匹敵する大きさへと變化した魔剣が、鮮血にも似た赤いオーラを纏い、その凶暴性を見せつける。

「にや……うにやあああつつっ!!」

赤い光の刃が出刃包丁を粉碎し、同時に放たれた地面を揺るがすほどの衝撃波がミーシャの小さい身体を吹き飛ばし、瓦礫の群れへと叩きつける。

「な……大騎士団長つつ！ くっ、セリーヌ。あなたいったい……どうしましたのっ!!」

騎士団長の身でありながら、それを統括する大騎士団長を飽きたおもちやのように扱うなんて。

セリーヌの実力と品格を認め、ライバルに相応しいと心から思うからこそ、エルスには彼女が本来のセリーヌでないことが痛いほどわかった。

だがそんな彼女の想いなど、まるで気にする素振りも見せずに、黒髪の魔剣士は、赤く染められたオーラを纏う漆黒剣をエルスと、その後ろのフィオナへと振り下ろす。

「フィオナ様にまで……っ。セフンナ・フィー……あああつつつ!!」

先ほどの戦いで体力を消耗しきった状態でのフィールドが、あっけなく破壊され、紅の閃きを受けたエルスが、その豊満な肉体を地面に横たえる。

「ミーシャ様……っ。エルスっつ! セリーヌっ、あなたに何があったの?! お願い。こんなひどいことはもうやめて!」

「あははっつ、何これえっ!? すごいわ、セリーヌちゃん。あなた最高の操り人形ねえっ!」

セリーヌによつて破壊され尽くした街の闇中から、場違いとも思えるエロティックなドレスを着た女が現れ、しゃなりしゃなりと腰を揺らしながら、こちらへ歩み寄ってくる。

妖艶という言葉が相応しい紫色の髪の女に、いち早く反応したメイベルローゼが口を開く。

「やつぱりあんただったのね、サーシャ。相変わらず悪趣味よね、このおばさんはっ!」

「あらあ、お姉ちゃんっって呼んでくれないの? 昔はあんなに可愛がってあげたじゃない? 可愛い可愛いメイベルローゼちゃん♪」

「可愛がったですって!? 私がどれほどあんたを憎んでいたか……!」

「お姉ちゃん……? じゃあ、もしかして……この人が……!?!」

「ええ、そう。帝国第一皇女サーシャオーギュスタン。クソムカつくドS女よ。大方そのバカ騎士をお得意の葉で手駒にしたんでしょうけど」

「母親は違つても姉妹よねえ。お姉ちゃんのことをよくわかつてる妹だわあ」

「……ちっ、ほんとムカつくオバサンね。でもよかった。私、ずっと前からあなたに言いたいことがあったのよね」

メイベルローゼは、その両目でキッとサーシャを睨みつける。魔法が使えない帝国内では決して言えなかった言葉を姉などとは塵ひとつも思っていない女へ向けて告げる。

「この淫乱女！ むごたらしくくたば——んむうううっ!!」

「メイベルローゼっ！ なっ、セリーヌ!? いや、やめて……あううっ！」

セリーヌが漂わせる黒いオーラが、瞬時に無数の触手へと変化し、魔眼姫の口へと挿し込まれる。メイベルローゼ、そしてフィオナの身体が、のたうつ触手たちにきつく締め上げられ、身動きひとつ取れなくさせられる。

「殺意を隠そうともしないなんて……あはっ、ほんと可愛い妹だわあ。お姉ちゃん、ゾクゾクしちゃう。それにフィオナ姫。あなたもよお。ふふ、ふたりとも、私たちがたあつぷり可愛がつてあげるわあ」

「くっ、このあばずれ女……死ね！ 自分の毒で、悶え死になさいよっ！」

「ああ、いいわよおメイベルローゼちゃん。お姉ちゃんに口答える妹が、これからどれだけ従順になるか、楽しみで仕方ないわあ」

「こ、のっ！ ……うう、くっっ!!」

きつく歯噛みするメイベルローゼだったが、その強気な姿はサーシャの言う通り、惨め

そのものだった。

必殺の魔眼は、サーシャが用意した黒いアイマスクを被せられているために、どれだけ陰惨なことを命じようと、まるで意味をなさない。

しかも全身をギチギチときつく締めつける触手によって取らされている格好は、人形のように細い両手を頭の後ろで組み、まだ発展途上ながらも、ムッチリとした女肉を実らせている両脚を大きくM字開脚に開かされているという、卑猥極まりないものだ。

胸元はだけさせられ、殺したいほど憎らしい女の前に、小ぶりなふたつの果実が曝け出されている。

幼いながらも太腿に乗った柔らかな女肉は、はつきりと「女」を感じさせるいやらしいものだ。卑猥に開かれている少女のデルタ地帯は、ショーツを剥ぎ取られ、まだ薄い恥毛と色艶のよい二枚の媚肉の蠢動が、サーシャに見詰められていると思うだけで、たまらない屈辱感と悔しさが募る。

「あつ、ふああつ……んくつ、サーシャっ！　ふううつ……はあ、はああ……っ」

拘束された身体がたまらなく熱く疼いている。

目隠しのせいで、触手の不気味さ、おぞましさが何倍にも跳ね上がっている。さらに、ネットリと身体中に纏わりつく触手からは、ベトついた半透明な液体——サーシャの調査した強力な媚毒液が絶えず分泌されており、初心な肌全身を触手がズルズルと這いずり回るのに合わせて、皇女を牝へと墮落させる催淫ローションがみっちり練り込まれていく。

(くうっ、無理矢理発情させられて……く、悔しいのに、あはうっ！)

珠のように美しい肌にはじつとりとした大粒の汗が浮かんでおり、スラリとした柔肌を舐めるように滑り落ちていく感覚が、対抗手段を失った魔眼姫に残された強いプライドを眨める。

「ああ、メイベルローゼちゃんがんばり発情してるわあ。んふふ、お父様好みのふしだらな身体つきだった、あなたのお母様には似ても似つかないと思ってたけどお……」

セリーヌが具現化させ、彼女と同じくサーシャの意のままに蠢く触手たちが、魔眼姫の遠慮がちに膨らむ太腿の流線型をジュールウツ！と淫靡になぞり上げる。

「ひうっ！ ううっ！ んんっ、く……はううっ！」

「立派な女の子……いいえ、牝豚の素養ばっちりなのよねえ。その媚薬効くでしょう？ 肌の下まで浸透して、血液そのものを媚薬成分に変えちゃうの。もう一生発情しつ放しの牝豚メイベルローゼちゃん、疼きが我慢できなくなったら、優しいお姉ちゃんがたつぷりと遊んであげるからね。ああ、なんて妹思いのお姉ちゃんのかしらあ」

「なっ……!! あふうっ！ 胸っ!! だ、誰が牝豚なんか……っつ。くうっ、馬鹿に、しないでよね……こんな媚薬ちつとも……あんっ、今度は腋!! ……んくっ、お尻もおっ！ はあはあ、い……いい加減に、お臍までええっ！」

目隠しされているために、いったいどこをどう責められるのか、まったく心の準備がでないまま、いいように身体を弄ばれてしまう。

「ひぐうっ、んふうううっ！」

(声がもれるっ、サーシャなんかには、感じてるところ……見られちゃうっ。あふうっ！)

同じ男の子供でありながら、妾の子である自分を他の皆と同じように見下すことしかない……こちらにとつても憎しみの感情しか湧いてこない姉に、大切な身体を齧られている。だというのに背筋にゾクリとした明確な快感が走り抜け、唇からは呪詛のような言葉ではなく甘い、姉には絶対に聞かせたくない、女としての艶めいた声もれ出てしまうことが、たまらなく悔しくて、きつく歯を噛み締める。

「うふふ、目隠しされると魔眼が使えないだけじゃなくて、全身とおつても敏感になるでしょう？ ほらあ、次はどこを苛めちゃおうかしらねえ？」

「はあ、くうっ……んんっつ、この変態女っ！ 殺す、殺してやるっつ！ 絶対に……ん、ああうっ、ふううっ！ か、身体が……ひううっ！」

折れない意志を示すように、強気な言葉を吐き出しても、媚薬を隅々にまで染み込まされた年頃の身体の疼きは止められない。

「あらあらあ、本当敏感な身体ねえ。しかも食欲♪ チンポ欲しくておねだりしちゃう？」

開くのを必死で我慢している股間の二枚貝を執拗にまさぐってくる、人の腕ほどもある触手だけでなく、細い糸のような触手が乳房の頂点で、痛いくらいピンピンに起立している、まだあどけない桃色の果実を力任せにギチュッ！ ときつく締めつけてきた。

「ひううっ！ ち、乳首いつ!! だ、誰が食欲……ちが、コレはお前が薬をつ……あ、ふ



ううっ！」

強烈な媚薬のせいで無理矢理昂らされた身体が、発情してしまっていることはわかって  
いた。けれど、帝国の「プリンセス」としてのプライドにかけて、自分から求めるなんて  
屈辱的なことは絶対にしない！

「うそつきねえ。あなたは見えないかもしれないけど、ほら、メイベルローゼちゃんの可  
愛いオマンコは、もうジツトリ、グチヨグチヨよお？ わかるでしょう？ エッチなお肉  
がブルブル震えてる。オチンポ欲しいって、いやらしいお口をパクパクさせてるわあ」

「そんなことな……やめなさいよっ。ソコ弄るなあっ。は、ああっ。勝手に、開く……ひ  
うっ、くひいっ！ あ、ああっ……はひいんっ！」

慣れた手つきでサーシャの右手の指が、うっすらとしか生えていないメイベルローゼの  
秘園の毛をかき分けてくる。ぷくりと充血した肉ピラに二本の指が触れ、面白そうに弄り  
回す。

ギユツときつく唇を閉じていたが、指を軽く膣内に突き込まれただけで理性が真っ白  
に染まりかけ、薬で無理矢理昂らされた情欲のまま、甘く艶やかな声を響かせてしまう。

「あああ、メイベルローゼちゃん、大事な大事な処女膜が破られちゃってるじゃない？  
ねえ、どうしたの？ うふふ、ねえつてばあ。お姉ちゃん心配でしょうがないわあ」

「あ……ああ、見る、なああっ！ ううっ、こ、のっ……ううううっ！」

必死に股を閉じようとしても触手で拘束された両脚は、ビクビクと無力に震えるだけだ。

二本の指で左右に押し開かれた牝の扉の奥、もつとも恥ずかしい、見られたくない部分を曝け出されてしまっている。

（こいつ、絶対知ってるっ。私が処女をなくしたこと……城で犯されたこと。悔しいっ。悔しいのに……く、うっ！）

湧き上がってくる恥ずかしさと悔しさのさらに奥から、たまらないゾクゾクとした快感が背筋を駆け上がり、脳天をピンピンと貫いてくる。

「悲しいわよねえ。淫乱なお姉ちゃんや母親なんかと違って、メイベルローゼちゃんは誇り高くて潔癖なはずで？ さあこれからが本番よお」

サーシャは心では絶対に思っていないことを流れるように並べ立て、こちらを嘲り笑う。「はあはあ、絶対に負けないわよ。あう、母親が違うだけで偉そうにしてるあんたになんか、死んでも屈するもんです……んむうううっつ！ ひゃ、ひゃにつ!? こりえええっつ!!」

気丈な言葉を吐き出した瞬間、その可憐な唇に、生温かく、ヌルヌルベチョベチョで、ミミズのように激しくのたうち回る太くて硬いモノ——触手が無理矢理突き入れられ、文字通りメイベルローゼの口内を、ク陵辱、そして、ク改造、し始めた。

「んぼっ、んぐっ、び、媚葉が……んぶううううっ！ ごきゅっ、ごきゅんっ！ んああっ、おぶおおおっつ!!」

肌に塗り込められるだけで、狂おしいまでの快感に晒されるほどの劇媚葉が、直接口内

からお腹の中へと、呆れるくらい大量に吐き出される。

「あ、あじゅいっ！ んあっ、んぶううっ……か、かりやだが……お、お腹がつつ！ 熱いあづい、ありゅいっ！ ど、どうらつて……わらひの身体……！ んくああつっ！」  
目で見えないから余計、自分の身体で湧き起こっている異常なまでの発情感に、理性が困惑し、蕩け落ちていく。

きつく拘束されている全身がピンツツ！ と激しく突っ張り、限界まで開いたすべての汗腺から牝のおいをたっぷり纏った情欲の汗が止め処なくメイベルローゼの可憐なボディラインを垂れ落ちていく。

「んじゆるううっ、んああっ、ひうっ、くうっ……ふいっ！」

（し、触手が美味しい……なんてえっ!! う、うそっ!! 興奮しちゃうっ、んじゆるるっ、触手チンポしゃぶるの……ああっ、やめられないっ！）

沸騰したように熱い媚薬血流が、身体中を淫らに改造し、ありとあらゆる箇所の性感帯を爆発的に高めてくる。

まだ一度の性行為しか経験したことのないメイベルローゼは、娼婦すら狂うほどの魔性の快感に漬け込まれ、皇女としての気位すらも牝豚へと墮落させられていく。

「あははっ、自分で触手にむしゃぶりついて、乳首ピンピンに勃起させて、オマンコもグチョグチョお。欲しいの？ チンポ触手欲しいんでしょう？」

「んぶうっ、い……いらぬわよっつ！ 誰が触手なんて下劣なもの……おっつ！」

アイマスクで視覚を遮られていることで、はつきりとわかってしまう。

強烈な媚薬はすでにどうしようもないくらいにまで身体を欲情させており、唇で触手をしゃぶっているだけで、勃起した乳首を縛られ弄られるだけで、すでにイってしまっただ。

（来るんじゃないわよっ。今アソコに触手なんていれられたら……いい、いれられたら……っ。くうっ）

どこまで淫らにされてしまうのかという恐怖と屈辱が、メイベルローゼの身体をよりのっそう敏感に昂らせてしまう。

そんな少女の悲壮な葛藤を、サディスティックな姉が見逃すはずはなかった。

「可愛い♪ じゃあ遠慮なくオマンコにぶち込んであげる。とびっきりの触手チンポをねえ！」

ゴリユウウツッ！ ズチユンンツツ!!

「あっ、あああつっ！ サーシャあつ、んあああああつっ！」

拒絶の言葉も、姉はまるで聞いてはくれなかった。触手から膣内へもたらされた快楽に、精いっぱいかき集めた抵抗の意志があっけなく弾き飛ばされ、乙女の身体に心に、逃れられない快楽の炎がくべられる。

（な、何なのこれえ!! 人間のオチンチンと全然違うっつ！ 比べ物にならないくらい気持ちいい……ダ、ダメよっ。こんな奴にこれ以上感じてるところを見せちゃ……あああつっ、

何で、何でなのよおっつ！)

極太触手の一撃が、女芯へと突き込まれる。触手の表面には無数のイボイボが生えており、そのすべてがメイベルローゼのざらついた肉ヒダを一斉になぞり上げ、脳髄にたまらない快感を流し込んでくる。

「あひいいいいっ！ ああっつ、んああっ、触手、やめ……んふいいっ！」

否定の言葉もすぐに本気の喘ぎ声にかき消されてしまう。充血しきった左右の陰唇が、触手の突き込みに合わせて卑猥にブルブルと震え、軽く人の腕ほどもありそうな肉触手をギッチリと卑猥に啜え込んだ女芯からは、濃厚なおいの愛蜜がプシィィッ！ と勢よく噴き出してしまふ。

「イ……イひいいっ！ そ、そんな……これすごいっ！ ああっ、私変になるっつ！ オマンコ、触手ズボズボきたらあ……だめええええっつ！」

(気持ちイイのおっ！ 悔しさが、飛んじやうつ。オマンコもつとして欲しいっ！ オマンコちようだい、触手チンポでぐちよぐちよにしてえっ！)

歯止め利かない初心な身体は、汚さや屈辱、プライドといった人らしい感情を置き去りにして、人外の触手勃起に、まだ幼さの残る身体をエロティックにアピールする。

「だ、めえっ！ くるっ、そんな……サーシャなんかに、触手なんかで私……あはっ、はああっつ!!」

(熱いのが込み上げてくるっつ！ イカされるっつ！ サーシャの前でイッチャ……っ

っ!! え……あああっっ!!

媚薬によって火照った身体が、憎い姉の前で絶頂に達するのを覚悟した瞬間、あれだけ激しかった触手の抽送がピタリと止まった。突き抜ける寸前にまで昂らされた媚薬塗れの若い身体は、発散しそこなった快楽を、強い切なさや疼きでメイベルローゼに訴える。

「な……何で……ええっ!!」

「ふふ、だってお姉ちゃんも妹思いなんだから。大切な妹が必死で『ダメ』って言うてるんだから、やめてあげるのが美しい姉妹愛つてもよねえ?」

「くっ、あんた……っ。はあ、ああっ……あんたあああっっ!!」

女を罵ることを生き甲斐としているサーシャが、絶頂寸前で焦らされる辛さを知らないわけがない。

「どうしたのメイベルローゼちゃん? 可愛いオマンコがヒクヒク切なそうよお? あ、もしかしてイキたかった? こんなグロテスクな触手チンポなんかイカされたい変態さんなの? そんなわけないわよねえ!!」

「く……あ、はうっ。黙れこのクソ女あっっ!! 絶対に殺すっっ! あうっ、ん……ああっっ!」

メイベルローゼが怒りを爆発させた瞬間、待ってましたとばかりに、膣内の触手がほんの僅かだけブルブルと震え出す。

焦らされきった蜜壺は、無意識にクイクイと腰を突き出し、自らの抑えきれない牝欲を、



サーシャに見せつけてしまおう。

「動いて欲しかったら、そうお姉ちゃんにお願いしてちょうだい？　母親は違っても私たちは姉妹でしょう？　うふふ、あゝはっはっ！」

絶対的な高みから見下し、高笑いするサーシャの顔を想像して、涙が溢れそうになった。今すぐこの魔眼で殺してやりたい。けれどそれ以上に……悔しくてたまらないのに、身体中がイキたくてイキたくて、もうどうにもできなくなっている。

「……はあ、はあ……ああ。くうっ、んくううっ」

(イキたい……くっつ、イキたい……イキたいいいいっつ!!)

綺麗な白い歯が切なげにカチカチとなり、蜜壺からトロリトロリと粘っこい濃厚な本気汁が溢れ出ていることを思い知らされる。

僅かに振動する触手肉棒は、絶頂寸前までは押し上げるが、決してその先へ進む一撃を加えてくれない。……もう限界だった。

「——イ、イカせて……。お願いします……くうっ、サーシャお姉ちゃん……妹のお願いを聞いてください！　あなたの可愛い妹のメイベルローゼを、汚くて最低な触手チンポで思いきりイカせてくださいいいいっつ!!」

ズチュチュツッ！　ドチュンツツ!!

絶対に言いたくなかった姉への懇願の言葉を口にした瞬間、アイマスクの向こうで、サーシャがこの上ない愉悦の笑みを浮かべるのが見えた。



同時に牝壺内の肉触手がこれまで以上の勢いで脈動し、誇り高い魔眼姫に、屈辱という快楽を塗り込んでいく。

ぬめる触手に拘束され、卑猥なM字開脚を強要されている身体が、ビクビクと小刻みに震え、細長い四肢にびつちりと情欲の汗が浮かんでは垂れ落ちる。

張り出した腰が、牡を誘うように大きくグラインドし、太い触手がブチュリと挿入された陰唇がクパクパといやらしく蠢いている。

「あははっ、とつても素敵よお。昔からお姉ちゃんのこと、淫乱ぐとか、ふしだらぐとか言っておきながら、触手なんか腰を振るメイベルローゼちゃん、大好きよおっ」

「ひいぐつ、う……うるさ、んひいっ！ ああつ、くるううつ！ 今度こそおつ、今度こそくるううつっ!!」

殺したいほど憎んでいるサーシャの前でイカなくてはならない。屈辱だ。もういつそ死んでしまいたいとさえ思う。でも気持ちいい。馬鹿にされ、見下されながらイクのが……たまらなく興奮してしまう。

「んあああつ!! イクッ！ イッチャうつ……あつひいいいっつ！」

吊り上げられたメイベルローゼの身体がビクンッ！ と大きく痙攣する。

「イッゲウウウウツツツ!!」

脳天に絶頂の稲光が閃いた瞬間、アイマスクが外され、サーシャのしたり顔が瞳に焼きつく。今なら殺せる。今なら――。

豪奢な金髪を振り乱し、フィオナは前後の穴をえぐられ、突かれ、妖しく、切なく悶え狂う。

「あひいっ、りようほうっ、両方に入って、すごいですううっ」  
ずっちゅずっちゅ、めりりっ。

飢えた獣のように腰を振り立てる男たちの猛攻に身を委ね、フィオナは牝の愉悦に酔いしれる。

「ああんっ、おまんこもケツまんこも、どっちも灼けるううっ」

「すげえアへ顔だな、お姫さん、そのでっけえおっぱいも揉みくちやにしてやるぜっ」

真下から腰を突き上げながら、両手に収めた肉球をぎゅうぎゅうと揉み潰す。愛撫とも言えない乱暴な扱いに、しかしフィオナは確かに愉悦を感じずにはいられない。

「ふひい、もつとお、もつとフィオナを滅茶苦茶にくらさいい〜〜ッッ」

はしたない王女のおねだりに男たちはさらなる腰の振り立てで答える。

アヌスを擦り立てる肉棒が腸壁をブリブリと引きずり出し、引き抜かれる度にフィオナは排泄の悦楽に舌を突き出して悶え狂う。

「ふひい、うんち穴もれちゃう、いやらしいケツ穴汁零れるうう」

「うおお、こいつ自分から腰を？」

陵辱はすでにフィオナにとつて恥辱ではなかった。

一匹の牝として牝の茎を受け入れ、よがり、痴態を晒す。そんな自分が一番自分らしい

のかもしれないと意識の片隅で思う。

「ああ……あひいい……わ、わらくし、みなさんの同志ですか……家族になれまひたか……」

「ああ、最高のエロ同志だぜ！」

「ドスケベ同志のケツ穴にちんぼ汁ぶちまけてやるぞおおお」

がしゅ、がしゅがしゅ、ずぶずぶつ。

飛び散る液体は男の汗か精液か、あるいはフィオナの潮か腸汁か。濃厚な牡と牝のまぐわいのにおいが部屋に充満し、発火しそうなほどだ。

「ぐおおおおお、いくぞ、出すぞ姫さんツツ」

「来てえ、来てください、フィオナのいやらしい穴に、おちんぼミルクどびゅどびゅしてええ……つっ」

「うおおおおおおおお」

びゅるっつ、びゅるるる……つ。

どく、どくんつ、びゅばあああつ。

膣穴と肛門に捻り込まれた二本の竿の先端から、呆れるほど大量の白濁が迸り、フィオナの中を満たしていく。

（ああ……これで……イセリアの民も救われます……）

再び強烈な愉悦が、フィオナの意識を包み込んでくる。





ボゴッ！ ボゴボゴッ！

五つ子でも詰め込まれたかと思うほどに膨張、張り詰めた腹部に、さらなる異変が生じていた。

不規則に内より押し上げられ、部分的に歪いびつに膨らむ。その都度意識が吹き飛ばされるほどの肉欲衝動が全身を循環し、同時に、痛みを蕩かすように肛門が奥深くまで穿られた。

ぬぼぶっ！ ぶぢゅ！ ぶぼぶっ！

（やあつあああ！ またつ、魔力があ……！ もおほじらないでえええ！）

卑しい音色を響かせる尻の穴が喜びに浸りながら痙攣するのに合わせて、泥は形状も体積も自在に変えて、常にもっちり。隙間なく腸内を埋め続ける。

（んひっ！ いっ、イイっ！ あひつあああはアア……！ 頭の、中つ、真っ白……に、なる……ううう！）

泥の中に身体が溶け込み同化していくような感覚にも苛まれながら。

ずりゆるぶぶっ！

胸の谷間を滑るように前後に動く泥勃起。その先端とのキスを、強制的にさせられる度。胸の疼ぎと腰の熱が同調して、子宮に降伏を迫る。

「フィオ……ナあああ……っ」

舌尖の泥をかき分けて逆らせた、か細い叫び。

ぼぢゅぶ！ ぢゅぼぼぢゅぶうう！

女の感情を肉欲一辺倒に染め抜かんと、咽と膣と尻の内部に詰まった泥が一斉に雄々しき胎動を轟かせた。

(もお、嫌あああああつ！ これ以上は……つ、もお……気持ちいいこと以外、考えられなく、なるううう……！)

ぷしやあつ……！

人外の刺激に耐えかねた股間から尿と蜜と腸液が、身体の底からは魔力がだだもれる。餌を得た泥スライムは、さらに食欲に穴という穴を穿り立て。

「えふつ！ あ、はつ……ひついイツ、ンンああああアアアアア！」

ごづんつ——！

ダメ押しと言わんばかりに子宮と直腸とを打ち抜いて、ぶぐりと泥の塊が膨張する。

その圧迫と律動、脈動に、張り詰めた女の腹は波打つて——。

「っひああああアアアッ！」

六度目の波が訪れた直後。絶頂の大波に飲まれ、イキ果てた。

(ふぁ、あぁ……またチュウチュウされて……つ、イツ、イクううつ！)

びぐんつ！ びぐびぐつ！ びゆるるぶぶつ！ ぷしやああアアア！

絶頂の波が寄せ返す度、尿も愛液も腸液も異常な量が噴きもれて、搾りカスの魔力が飛散する。

ますます好き放題に律動し続ける泥勃起によって、延々高みに押し上げられてはまた噴

いて――。

何もかも吸い尽くされて空っぽとなった心身に、肉悦楽だけが充填されてゆく。

天井知らずの恍惚と喪失感に蝕まれながら。とつくに感覚のなくなった右腕を懸命に伸ばそうとする。

剣を握っているのかいないのか。それすらわからぬ腕に掴めるものなどあるわけもないのに――。女騎士の意識は、じきに肉悦楽の波に攫われて、泥の深淵へ落ちていった――。

びゅぶぢゅりゅるるるうううっ！

ゼリー状の巨大スライムが歓喜を表すように全身の腐肉を蠢かせ、不気味な音色を轟かせる。

「諦めないで。魔法を撃ち続けて！」

エルフ族特有の尖った耳をより尖らせてティファーナが発破をかけるものの、同様に諦めていない人間は、もはや数えるほどしかないのが現状だ。

巨大泥スライムの体内に飲まれて消えたセリーヌの死。そして対抗する術を失った自分たちの全滅の予感を、大半の者が確信し、絶望に覆い尽くされようとしていた。

(どうすればいいの……?)

希望はまだある。メイズVIIに潜ったままのフィオナ王女さえ生きていてくれれば、王家の血筋は守られるのだ。





## 牝豚騎士、洗脳調教に墮つ

桜空

洗脳一日目。

イセリアの北東に位置するグラマトン聖教会には、一般兵には知られていない地下牢が存在する。知っているのはごく一部の大臣と、淫祇邪教に通じる者のみ。

「ここが、グラマトン聖教会……いえ淫祇邪教の本拠地ですね」

オーダイで囚われたエルスは気がつくのと、玉座とまではいかずとも丈夫な椅子に拘束されていた。服装は薄紫のチュニックに紺のタイトスカートで、囚われた時のままショーツも穿いていない。

何とか逃げ出せないかと辺りに目をやる。壁一面にコケやカビが生えていて、窓がないので風通しも悪く湿気がこもる。

地下であるとは知らないエルスにしてみればすべてが不快だった。

「仮にも聖教会と名乗るのならもっと居心地よくしなさいよ。いえそれよりもフィオナ様……セリーヌはフィオナ様を守り通してくれたかしら」

自分たちでは守りきれなかった姫を、どうか守ってあげて欲しい。それだけを切に願う。その時、カツカツと女性ものの靴音が石畳に響いた。

「お目覚めですか？」

「……シフォンIIアビゲート!？」

膝よりもなお下に伸びるアッシュブロンドの髪と胸の大きさが目立つ女性の名を呼ぶ。常に目を細め微笑んでいる爆乳美女は牢に入っては来ずに、外から対応する。

「私を捨てメリアを殺したイセリアすべてに復讐すると誓いましたが、今は貴女よりもっと大事な用があるので、私は何もできません」

(でししたらなぜ来たんですの?)

「イセリアを恨み、憎んでいる者がいると知ってもらうためです」

心を読んだような応答にじつとりと嫌な汗が浮かぶ。ような、ではなく『サトリ』の力によって実際に読んだのだが。

「ですので、これで我慢してもらおうかと思いましたが」

石畳を鞭でピシャンと打つ。すると天井から何かが垂れ下がってきた。ひとつしかない大きな目玉がぎよろりとエルスを視認して、ゆっくりゆっくり恐怖を煽るように、不気味な魔物が下りてきた。

茶褐色の身体はタコみたく骨がない軟体生物なのか、うねうねと足、というより触手を伸ばして移動していた。形だけなら魔女の被る三角帽に近いかもしれない。

(何ですの、この魔物は。見たことありませんわ)

「ウェルズヘイトといってね、この辺りにしか出現しないモンスターよ。戦闘力は低いけれど、一度取りつけば洗脳が待っています」

「洗脳、ですって!？」

おぞましく許されない単語に声を荒らげ目を剥く。

どうにか逃れようと足掻くのだが、頑丈な椅子は地面にくっつけてあるのか、ピクリともしない。椅子の背から回した縄によって身体も動かせず、椅子の脚とエルスの足をくぐられ動くのは頭のみ。

「どうやって洗脳するつもりか存じませんが、私は絶対に負けません。いいですこと、絶対に、です。必ずアリオナ様をお救いいたしますわ!」

力強く、負けん気に溢れたアメジスト色の双眸で元同僚を睨みつけた。

「ふふ、楽しみにしてますよ」

地下牢を去っていったシフォンがこの後、アリオナのもとへ向かうとは知る由もないエルス。魔物はゆらゆら宙を舞うように下りてきて、とうとう金色に輝く頭に取りつく。

頭部全体を覆い紫色の瞳まで張りつき、ぬちゃつと湿った嫌悪しか抱かない質感で視界を隠される。闇に包まれ、不快なので目を瞑る。するとウエルズヘイトは髪よりも細い触手を伸ばして、エルスの耳と鼻の穴に入れてきた。

(何、何をしようとしていますの?)

得体の知れない化け物の、行動自体も理解できず、視界も暗闇に包まれているので恐怖が先に来る。

「嫌っ耳、鼓膜が破けますわ! 鼻も奥まで苦し……げほっげほ」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



